

フランスがき類による新たな広島ブランドの開発に向けて

水産研究部 副主任研究員 田村 義信

ねらい

近年需要が伸びている殻付かきであるが、単価を保ちながらシェア拡大を図るために、かき小町や縞かきといった当センターの開発した技術を活用した新ブランドの殻付かきが市場に投入され、新たな需要を開拓している。

フランスがき類の仲間コケゴロモは独特の食味と美しい色彩の殻を持つかきで、殻付かきブランドとしての潜在能力を備えていると考えられる(図1)。このコケゴロモについて当センターが保有するマガキ種苗生産技術を活用し、その特性とブランドとしての可能性をさぐるための試験を実施中であり、ここまでの取り組みを紹介する。このコケゴロモのブランド化はマガキ以外の広島かきブランドの拡充に先鞭をつけるものと期待される。

概要

1. 産卵・産仔状況の調査

フランスがき類の繁殖においては、マガキの様な体外への放卵・放精(以後、産卵とする)は行われず、産卵および受精は殻の内側で行われ、内部で成育したD型幼生が殻の外へ放出(以後産仔とする)される。

また繁殖の時期については、マガキの産卵が主に夏場に行われるのに対して、コケゴロモと同じくフランスかきの仲間であるイタボガキでは梅雨入り前から産仔が行われることが知られていたが、今回天然で採集したコケゴロモの産仔状況を調査したところ、5月中旬から8月中旬までの産仔が確認された(図2)。

産仔されたD型幼生の平均殻高は約150~180 μm と、マガキの変態直後のD型幼生が約60 μm 程度であるのに比べて著しく大きかった。一回あたりの産仔数は多くて百数十万程度であり、マガキに比べ少ない数であった(図3)。

2. 幼生飼育の試行

産仔状況の調査時に得られた平均殻高182 μm のコケゴロモD型幼生を、当センターが保有するマガキ幼生飼育技術を活用して幼生飼育を行った。

幼生は飼育開始から2週間後に平均殻高が約300 μm に達するまで成育し、付着期幼生となった(図4)。

3. 採苗方法の検討

幼生飼育後に得られた付着期幼生の採苗方法として、カルチレス採苗、コレクター採苗等の方法について検討した。カルチレス採苗は砂粒等の微細粒子に幼生を付着させる方法で、マガキでは形の良い種苗が得られる採苗法であるが、コケゴロモにおいては種苗の形状に問題が発生した(図5, 6)。コレクター採苗ではマガキの人工採苗技術を活用して、同様に稚貝を採苗することが出来た。稚貝の形はコケゴロモらしいものであったが、採苗時、あるいは採苗後の密度調整が課題であった(図7)。

今後の展開

- ・種苗生産技術の技術移転に向けた採算性の検討
- ・採苗後の種苗管理方法の検討
- ・養殖サイクルの推定、出荷サイズ、出荷時期の検討



図1 マガキ (左) とコケゴロモ (右) の殻およびむき身

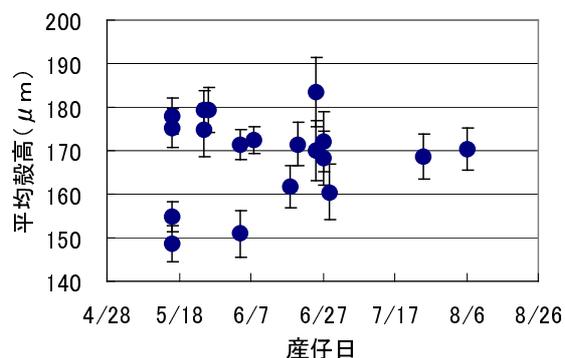


図2 コケゴロモの産仔時期と幼生殻高

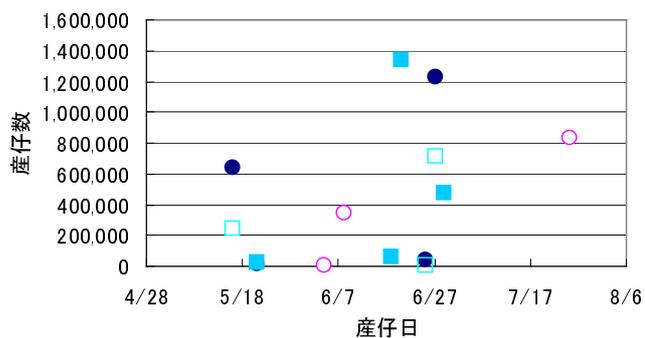


図3 コケゴロモの一回あたり産仔数

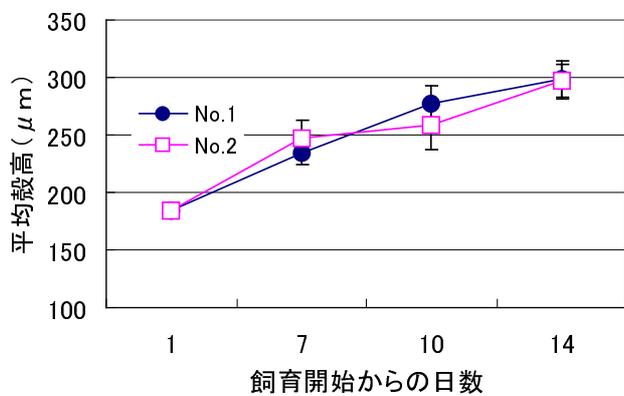


図4 コケゴロモ幼生飼育時の殻高の推移

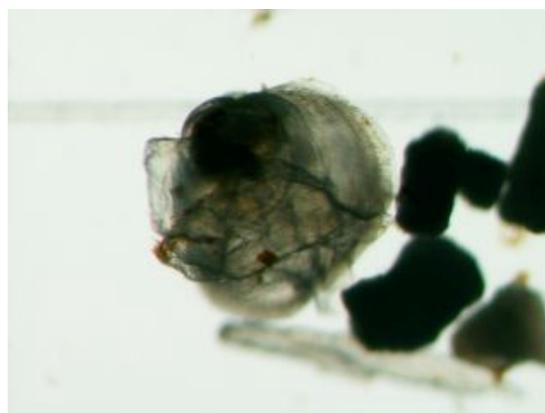


図5 付着直後のコケゴロモ稚貝



図6 カルチレス種苗(採苗から4ヶ月後)



図7 コレクター種苗(採苗から4ヶ月後)